

十三年目の手紙

「三年になります」と答えると、「もう三年？早いですね」と返される。その度に胸の中をかきむしられる思いでした。三年は長く苦しい日々でした。

突然の心臓発作からわずか一時間半、ひとこともなく帰らぬ人となった人夫。手続きの度に必要書類の“死亡診断書”事実を受け入れると突き付けられるようで、胸がはりさけそうでした。それでも生活は待ってくれません。生活を維持するために無我夢中の日々。

当時、大学生だった長男と中学の長女はそれぞれ大学を卒業、結婚して幸せな家庭を築いています。三人と二人、計五人の孫がいます。しかも長女は、ひとり暮らしの私の家へ「家賃が助かる」と家族で転がり込み、四才と一才の孫がギャングのごとく、家を荒らしています。

事情があつて、しばらく八十七才の母を預かっています。親子四代が同居しています。それはまあ、賑やかな毎日ですよ。

もし、あの時、発作など起きなかつたら、夫婦二人の平穏な日々を過していただけるのに。でも、それはかなわぬ夢です。もし、あの時、心臓だけでも動き続けてくれたら。ずっと願って

いたことです。でも、植物人間の状態が続いていたら、今の生活は成り立ち得ないでしょう。逝ってしまったのは、私への思いやりだったのでしょいか。

毎朝夕の読経でいろいろな思いがよぎります。このごろでは、孫達も一緒に手を合わせていることをご存じですよ。

涙が枯れるほど泣いていた私は、会社勤務と家事、孫の遊び相手、そして母の世話にと大忙しです。全て、あなたが差し向けてくれたことなのだ、感謝しています。

六十才までにあなたの許へ行きたいと思っていました。もう少し待って下さい。

私は今、幸せです。ありがとう、あなた。